

---

# トラブルDAYS！

ぴよこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

トラブルDAYS！

### 【Nコード】

N5279Z

### 【作者名】

ぴよこ

### 【あらすじ】

「おかえり、花音ちゃん」「…どちら様？」

ある日、仕事から帰った私を待っていたのは、ほかほかの温かいごはん、沸かされたばかりのお風呂。それから、日本人離れの容姿をした綺麗な男でした。

だからあなたは誰なのおおお！?!?!?

変態クォーター男に惚れ込まれちゃった、美人OLさんのトラブルな日々。ここに開幕！

## First Contact (前書き)

ヘンタイが脳内で暴れ回るので、とりあえず少しでもアップします。

## First Contact

「…どちらさま？」

見慣れた1LDKの部屋。

ピンクのカーペットに白い家具。ストライプと花柄のカーテン。

…間違いなく私の部屋だ。

「おかえり、花音ちゃん」

先日近所の雑貨屋で見つけたブタさんのミトンで鍋を持つ男。

さらさらの明るい髪の毛に、日本人離れした端麗な容姿。  
くつきりした堀の深い瞳と高い鼻。

女の子の中でも背の高い私が、見上げるほどの長身。

「…ハーフ？」

「残念。クォーターです」

ああ、クォーターか。なるほど…

「花音ちゃん、ごはんにする？お風呂にする？…それとも僕にする？」

「はあ！？」

「初日でちょっと恥ずかしいけど、花音ちゃんが望むならall o  
keyだよ！！」



## t r o u b l e 1 - 1

いや待って。

落ち着くのよ花音…っ！！

ここは私の部屋。

さっきも確認したし、それは間違いない。

今日は6時半に起きて、お母さんから届いた手作りベーグルを食べて、髪の毛巻いてメイクして。きちんと鍵をかけてから家を出たはず。

出社して、いつも通りに業務をこなして…お昼はおいしいパスタランチを食べて。

ちょこつと残業して、7時には会社を出た。

あつてる！？あつてるよね！？

いつもと何ら変わらない普通の1日だったよね！？

そこから電車に乗って我が家であるこのマンションの最寄り駅に着いて。

えーと、駅前のイルミネーションがあまりにもキレイだったから少し寄り道して…。

明日からのクリスマスを挟んだまさかの素敵な三連休を幸せに過ごすであろうカップルたちに囲まれて、彼氏のいない私は「みんな出掛けた先で喧嘩したらいい！！」とか最低な事を心の中でこっそり思っ

コンビニに寄って焼酎一本とつまみを買って、それで帰ってきたら知らない男が鍋作ってお出迎え！？

はっ！！

あれなの！？

あれが悪かったの！？

幸せに水を注すようなこと思ったからバチが当たったの！？

24歳独り身女のちょっとした嫉妬の裏返しなの！？

いいじゃない！！

うらやましいんだもんっ！！

「おい花音ちゃん」

「……………」

「Hey Baby？」

「ベイベーじゃないわよっ！！気色悪いこと言わないで！！！」

「せっかくのお風呂もごはんも冷めちゃうよ？まあどっちもまた温めればいい話だけど。そういえば花音ちゃんちのお風呂は追い炊き機能がついてるんだね。便利だなあ」

当たり前じゃないの！！

毎日の半身浴のために追い炊きのついてる物件わざわざ探したのよ！！

てゆーかそろそろもっ回聞いてもいいよね！？

「あなた、誰？」

ゆっくり、はつきりと、ただとできるだけで声を張って、私は言った。

こちらの変態は、たまにうつとうしい英語を使ってくるけど、日本語はペラペラみたいだし、その辺は安心だ。

ただでさえコミュニケーション能力低そうなのに、言葉も通じなかったらたまったもんじゃない。

名前も知らない顔のだいぶキレイな変態は、ものつすごおく心臓に悪い、煌びやかな笑みを浮かべると、持っていた鍋をコタツのしてあるテーブルに置いた。

私のお気に入りであるブタさんのミトンを外して現れたのは、これまた石像のようなキレイな手。

真っ白で、とても大きくて。陶器のようなツヤツヤの肌、爪の形まで完璧だ。

本当に何者なの？この男は。

「はじめまして、花音ちゃん。僕の名前はRuie Daisy  
Carolと言います。よろしくね」

「私にも分かるような発音で、もう一度お願いできる？」

握手を求めたのであろうそのキレイな手を、私は握らない。

だってなんて言ったか全くわからなかった。自慢じゃないけど、高校の時のリスニングの授業はほぼ意味が理解できなくて、毎回赤点祭りだった。成績はもちろんひよこさんだ。(2つてことね。5段



階でだよ！)

「Of course! ルイ!! デイズリー!! キャロルです。first nameはRui。だからルイって呼んでね、花音ちゃん」

「ルイ…さん」

日本語英語というのだろうか。わかりやすく言い直された名前をやっと理解し、私がその手を握ると、そのルイとかいう名前らしい変態は、こともあるのか私の手を顔の高さまで持ち上げて、そのまま甲に小さくキスをした。

「ぎゃーーーーー!!!!!!」

私の断末魔が部屋中に響き渡る。でも変態はこちらの反応など全然気にしてない。

いや、気にできないから変態なのか。そうしている間にも、何度も何度もキスを繰り返す。

なんとか手を離そうと、ねじったりひねったり(同じか)しても、力が強いのか掴み方がうまいのか、全くほどけない。

「ちょ…っ!! やめてよ!!」

「どうして? 挨拶なのに」

心底不思議そうにする変態めがけて怒鳴り声という砲弾を発射する。

「ここ日本だから!! てゆうか、いくら挨拶でもそんなに何回もしなくていいでしょ!! 分かったら今すぐその顔をどけて手を離せっ

「……」

「じゃあ、ここがもしイギリスならこのままキスしててもいいの？」

「屁理屈言つなあぁ……！！！！！！！！」

「……残念」

そう言つてやっと唇を私の手から離れた変態に安心している時、それは起きた。

ぺろり。

手に生温かい感触。

ちろりと覗いた真つ赤なそれはやけに扇情的で、なんつーか、エロい。

あまりの想定外のこと、一瞬落ち着いてその様子を見守っていた私はすぐに我に帰る。

なっとなっとなっ、舐めたぁー！？！？！？

舐めたよね！？今完全に舐めたよね！？

初対面の女の子の手を舐めるのが外国では普通の挨拶なの！？いやありえない！！！！！！！！

驚愕している私を熱っぽく見つめた変態はやっと私の手を離すと、その瞳のままにつこり微笑んでから言った。

「今日からお世話になります。花音ちゃん。」

「ふざけんなああ……！！！！！！！！」

ドッカーンと大噴火した私を見て、変態は声を上げて笑っていた。今日からお世話ってどうゆうこと！？

っーかまだ名前しかわかってないんですけど！？

血圧上がりすぎてくらくらしちゃう。

まだ仕事から帰ったままの私はコートも脱いでいない。

どこの誰なのかを聞くだけで、なんでこんなに体力を消費しなきゃならないんだろう。

ああダメだ。このまま変態のペースに乗せられたら、とんでもないことになるっ！

そう思った私はとりあえずコートを脱いで、クローゼットにかけるべく移動を始める。

「花音ちゃん、とりあえずごはんにしちゃうね？」

なにがそんなに嬉しいんだかわからないけど、ニコニコしながらキツチンに戻る変態は無視だ！無視！それに限る！

コートをハンガーにかけて寝室にあるクローゼットへしまい、部屋着に着替える。もこもこした素材のそれは、ミント色でドット柄。

で、なんと780円！この手のものは、ひと冬使えるかどうかってくらいに割りとすぐボロボロになっちゃうから、安くていいの。でもすごいかわいい！

昨日卸したばかりのお気入りのその部屋着は、780円だけど私のテンションを一気に押し上げてくれた。かわいいのに温かい。いい仕事するぜ。かわいけりゃいいってもんじゃないのよ部屋着はっ。機能性も大事！

そのまま洗面所に向かう。

念入りに手を洗って、うがいをしてから、母から送られてきたアルコールの消毒剤をワンプッシュした。

そして手にすり込む。これでもかという程に。

そして巻き下ろされている髪の毛を耳よりも低い位置でふたつ結びにする。

24にもなつてふたつ結びはだいぶ痛いんじゃないか。今日も鏡に映る自分に問いかける。

だけど習慣って恐ろしいもので、アップにしたり、お団子にしたりすると、家にいるのにドーにもリラックスできない。

だからやっぱり今日も辞められない。別にこの髪型で外に出るわけじゃないし普段はいいんだけど、今日はあの変態がいるし、ちょっとだけ悩んだ。まあでもいいか。変態だし。あっちの方がよっぽど恥ずかしいわ。へっ。

これでよし。ちょっと気持ちも落ち着いた。

変態は、初対面の時から私の名前を知っていた。

それどころか、施錠のしてある家に勝手に上がり込んで他人（私のね）のものを使っている。

これって、私が認知しなければ立派な犯罪じゃないの？

どう考えてもおかしいでしょう。

あんな派手でインパクトのある容姿、一度見たら忘れることはないだろう。あの変態とは今日が初対面。それは自信を持って言える。

ポケットから携帯電話を取り出して、110番を押す。あとは発信ボタンを押せばすぐに繋がるしてから、二つ折りにたたんで、ポケットに戻す。

犯罪者の可能性も十分ある。

それを頭に叩き込んでから、大きくて息を吐いて気合いを入れた。



## t r o u b l e 1 - 2

リビングに戻ると、テーブルの上には一瞬みただけでよだれが出そうになるほど、見目麗しい料理が並んでいた。

お鍋はまだ蓋が閉じられたままなので何の鍋なのかはわからない。ただ、とてもいい匂いがする。

その他にも、パリパリのあぶら揚げの上に大根おろしと薬味がたっぷりかかったもの。

サーモンとアボガドとチーズの生春巻き。

黄金色の厚焼き卵。

酒飲みには嬉しい、たこわさ。

そしてふつくらした白いご飯。（いつも私が炊いてるのより明らかにおいしそうに見えるのはなぜ）

文字通り、その料理たちは所狭しと並んでいて、気持ちの問題かもしれないけどその周辺が輝いて見える。

え。あのさ、お鍋の曰って普通は鍋だけじゃないの？

ここぞとばかりに手抜きしない？

こんなに副菜作ったことない！

てゆーか1人暮らし始めてからは鍋だって作ったことないけど！

なんたる居酒屋みたいなラインナップ。すごい好みなんですけどっっ！！

並べられた料理を見て眼差しを思わず輝かせると、変態はとっても嬉しそうに笑った。

ただとお鍋の蓋を開けながら言ったその一言で、私は我に返る。

「張り切ってたたくさん作ったから、いっぱい食べてね。お鍋はこま豆乳鍋だよ。花音ちゃん、好きでしょう?」

思わずひきつる笑顔を隠せない。

なんであんたがそんなことご存知なんですか!?

ダメダメ!このまま餌付けされたらダメよつ花音!!

おいしそうだけど…!

さっき買ってきた焼酎片手に乾杯したいけど…!

この変態の正体をはつきりさせなくちゃ!!

ポケットの携帯電話を再度握りしめて、オコタに座っていそいそお鍋をとりわけると変態を見つめながら私は口を開いた。

「…どうやってうちに入ったの?」

「もちろん、玄関の鍵を開けて、だよ?」

どうしてそんな当たり前のことを聞くか分かりません、みたいな当然な顔をして変態は答える。

この…!

「初対面のあんたがどうしてこの家の鍵を持つてるのよ!答えの内容によっては警察に突き出すわよ!?」

「それは困るなあ。花音ちゃん、本当に何も聞いてないの?」

「何も聞いてないからあんたが何者なのか知らないのよ!!さっきから言ってるでしょ!!」

「僕、お母さんに花音ちゃんのおうちに泊まらせてもらうこと、許可頂いてるんだけど。鍵ももちろんお母さんからお借りしたんだよ」

「ええ！？？！？」

あまりに驚いて、手から力が抜けた。携帯が間抜けな音をだしてして床に転がる。

お母さん…お母さんだつてえ！？

「どーいうこと！？」

「話せば長くなるんだけど…。うちの母と花音ちゃんのお母さんは古くからの友人でね。僕はイギリス国籍をとってずっとあちらにいたんだけど、ワケあって日本で仕事を始めることになったんだ。慌ただしく身ひとつでこちらに来てしまったものだからまだ不動産屋も回れてなくてね。」

「とりあえず、座つたら？」と、我が家のはずなのにすでに妙に馴染んでいる変態に席をすすめられる。話は長くなりそうだし、正直びつくりすぎて足に力が入らない。座つたそうがよさそう、と判断した私はまだ警戒を完全に解かないまま、床に落ちていた携帯を拾ってから席に着いた。

「それで、母が花音ちゃんのお母さんに口を聞いてくれたんだ。僕としてはホテル暮らしで充分だったんだけど、母と挨拶に行ったら「うちの娘のとこ泊まったらいいじゃない！」なんてすすめられてね。恋人もいないようだしどうせ年末年始飲んだくれて過ごすだろうから、食事の世話だけしてやってって、この家の鍵を頂いたん



だけど…」

「聞いていなかったみたいだね」と、苦笑する変態を見て私はすぐさま携帯で母のメモリを呼び出した。

有り得る。うちの母なら言いかねない…!! 変態の母の口マネはともよく似ていて、説得力が満載だった。

そうだったらもう直接本人に問い詰めるしかない!! のに!! 「電波が届かないところにいるか、電源が入っていないためかかりません」だあゝ!? ふざけるなああああ!!!!!!

実家の家電、父の携帯、と鬼のような形相（多分）で電話をかけまくる私に、変態はにつこり笑って最後通行を言い渡す。

「お母さんとお父さん、今日からグアムに行くって言ってらっしゃったよ。もう出発したんじゃない?」

バツと思い切り振り返ってカレンダーを見やれば、12月23日から1月7日まで、長い長い赤い線が伸びていて、「父、母グアム旅行。ちくしょう!」と書いてあった。あれは間違いなく私が書いたものだ。

父と母はたまりにたまった有給を、まさかのお正月休みに連結させて、今日から長い連休に入り、ふたりでグアムに行く、と先週電話した時に言っていた。仕事からの帰り道、毎日の習慣となっている母との電話の中でそう言われて、あまりのうらやましさにのた打ち回ったことは記憶に新しい。

そうだ…! 今日の夜の飛行機でもう向かってるはずだ…! どうりで今日はいつもの時間の電話に出なかったはずだ。行く前に連絡くらいくれてもいいじゃない!!

「若い娘の家の鍵勝手に渡すなんて……!! あんの母親！」

うちの母はとにかく顔が広い。どこでどう知り合っただか聞きたくもないような方々がしょっちゅう実家に訪れて、その度にそういう人たちを家に泊めていた。

飲み屋で相席したおじさんを泊めた時はさすがに父に怒られていたけど、母はそういう人なのだ。よく言えば懐が深い。悪く言えばただの考えなし。人を見る目は確かだと思うけど、今までは運がよかっただけのように感じる。いつ犯罪に巻き込まれてもおかしくないと、何年か前に父に諭されてからは、そういったことはだいぶ減ったと聞いていた。

なのに!! 久しぶりのおせっかい、まさか私のマンションまで宿代わりにするとはっ! やりかねない!! むしろ一人暮らしはじめてこの何年かこういうことが一度もなかったことの方が不思議かもしれないっ!

諦めにも似たため息をひとつついて呆然とする私を申し訳なさそうに見つめた変態は、取り分けてくれたお皿をこちらに差し出して、慰めるような口調で話し始める。

「僕も年明けには本社に出勤しての仕事が始まるし、それまでには家を見つけて出て行くから。長くては二週間ほど、お世話になります。花音ちゃん」

湯気のたったそれを受け取り、中身を見ればにんじんがお花の形をしていた。わざわざ型抜きしたのだろうか。かわいいそれに思わず笑みがこぼれる。

きつとこの変態も、多分お母さんの押せ押せに圧倒されて断れなかったんだろっ。母が旅行から帰ったら金輪際このようなことをしな

いようにキツく言ってやらなければ。

一旦お皿をテーブルに置いて、崩した足を正してから、真っ直ぐと変態に向き合う。

「きつとうちの母が強引にことを進めたんですね。犯罪者扱いしてすみませんでした。あの、お母様にもよろしくお伝えください。」

ペコリと頭を下げれば、慌てた変態思い切りかぶりを振った。

「そなたっ！頭を上げて、花音ちゃん。僕たち親子は久しぶりの日本で身よりもないから、とても感謝しているんだ。だから…」

「お母様もこちらに？」

疑問をすぐに問いただせば、歯切れ悪く、口を濁す。

「あ、うん…。僕は、ちょっとそこへは行けないんだけど、母も一応は不自由なく生活しているだろうから。あの…」

途端にしどろもどろになった口調が怪しい。ま、ワケありってことね。出来れば関わりたくない。私は母とは違う、面倒ごととはごめんだ。

「ならルイ…さんも、どこかホテルに移動されたいかがですか？事情はだいたい把握しましたけど、うちの母の言いなりにならなくてもいいんですよ？その方が過ごしやすいでしょう」

お互いに、ね。と心の中で付け足す。そして出来ることならこのまま出て行ってくれと言わんばかりの失礼な言い方を承知で詰め寄れば、変態はあっさりその提案をぶっ潰した。

「いや、出来れば玲子さんのご好意は無駄にしたいくないんだ。僕ら親子の恩人だから。花音ちゃんは、やっぱり迷惑…だよな？」

やめろおおおおお！！！！！！

そんな捨てられたら子犬のような目で見つめるなあああ！！

鍋からたつ湯気がまたナイスな演出を醸し出して、スモークのたかれた中に置き去りにされた子犬が一匹、そこにいるみたいだった。

悶絶する私に続けて口を開く。あ。ちなみに玲子とはうちの母のことです。

「もしかして、恋人がいる？」

「いや、それはいないけど」

否定してから気づいた。恋人に悪いから、とか言えばホテルなりなんなり新しい宿探してくれたんじゃないのぉ！？この料理の材料だって、もちろん型抜きだってうちにはないんだから買ったんだろうし、お金は持つてるでしょうに！！

「そう。よかったあ」

とっても嬉しそうに笑う顔を見て、私はほっとした。あの捨て犬のような顔は本当にやめて頂きたい。

「あの…でも、母も言っただと思うんですけど、私本当に料理とか全然しないんです。掃除だけは部屋が汚れるのが嫌だから一応しますけど。だからなんのおもてなしもできないだろうし、年末は仕事

が忙しくなるんで精神崩壊一步手間、みたいな感じになるから嫌な  
思いさせるかも…」

もうこれ以上理由がないぞ！！他に泊まると頷いてくれ！！頼む  
！頼む！！

「そんなの全然構わないよ。泊めてもらう以上家事は僕がやる。僕  
の仕事はパソコンさえあればどこでもできるから、ね。料理は小  
さい頃からやっていたから得意だし、花音ちゃんの好きな食べ物  
は玲子さんからちゃんと聞いてきたよ。」

「確かにお料理は得意みたいですね…。」

目の前に並ぶ料理たちを見て、生唾を飲む。

超食べたい、ちょーつつ食べたいっ！誰かの手作りっただけで既に  
嬉しいのに、自分の好みが全面に押し出されたメニューの数々！こ  
の人がいれば、毎日こんな素敵なのが食せるのか…。

「それと、仕事が忙しい時期に余裕がなくなるのはみんな同じだよ。  
僕はいろんな花音ちゃんが見たいんだ。だから余裕のない花音ちゃ  
んだって、見れたら嬉しい」

ゾゾゾゾッ！！！！！！

ちよっと！！体中に鳥肌がたつたじゃないの！なんっでいちいちそ  
んな感じなの！？あれなの！？口の中に女を喜ばせる台詞装置とか  
しこんでんの！？残念ながら嬉しいどころか気色悪くてたまらない  
んですけどっ！

私はテーブルに肘をつき、手のひらで額から頭を支える。

なんかもっ…逃げ道が全くない…。もうこうなったら仕方がないの

？母のしたことだ。娘の私にだって責任はある。

実は食べ物につられた、とかではない。断じてない。ないったらないッ！……！

「あの」

「なにかな？」

「フォンダンシヨコラ、作れますか？中からチョコレートがトロ～つてでてる…」

「もちろん作れるよ！お菓子作りもたくさん練習したから、まかせて！」

「練習？」

「あ、いや、小さい頃にね！」

綺麗な瞳に戸惑いが揺れる。

この人隠し事とかできないな。すぐバレそう。

じいっと見つめていると、居心地が悪いのか恥ずかしいのか、顔を赤くして下を向いてしまった。なんかモジモジしてる。モジモジくんかっ！

「…わかりました。二週間、ですね？」

「花音ちゃん！！」

ああ、お尻からパタパタ尻尾が見えるわ。やめてちょーだい。大の犬好きな私は判断を誤りそうになる。これは犬ではない。れっ

きとした人間なんだから。抱きつきそうな勢いで手を伸ばしてきた変態を私は手の平を前に突き出すことで制した。

「ちょっとでも変なことしたら叩き出しますよ。むやみやたらに触らないでください。私は日本人ですので」

調子のんなよ、と目で伝える。見た目はいいけど、初対面で手を舐める変態なのだ。甘い顔したら何されるかわからない。

「わかった。花音ちゃんの嫌がることは絶対にしない。誓うよ」

「I promise」右手で拳握って左胸を叩く。そんな姿もやけに様になる。本当にクォーターなんだろうか。イギリス国籍ってことはおじいちゃんかおばあちゃんがイギリス人なんだろうけど。あまりに整っているその容姿の四分の三が日本の血筋だって言われてもどうにもピンと来ない。

「では改めて。桜木花音です。二週間よろしくお願いします、ルイさん。」

「こちらこそ。敬語は使わなくていいよ。最初みたいに元気な花音ちゃんがかわいくて好きだなあ。あと、さん付けもいらないよ。ルイって呼んでくれたら嬉しい」

「…じゃあ、おいおいで」

「かわいい」とか「好き」とかポンポン言う男は心の底から信用できない。ばーい花音調べ。さっきから甘い言葉の連続だし、女好きなのか天然でタラシなのか。それともイギリスの方ってみんなこん

な感じなの！？

まあもうこちらの嫌がることはしないと言っているし、とりあえず心の中で変態と呼ぶのはやめよう、二週間でも同居人だもの。できれば仲良く過ごしたいじゃない。

こうして私とルイの、期間限定同居生活が始まった。

同時に、平穩だった私の人生がトラブルの絶えないものへと変わっていく幕開けとなったのだった。



## t r o u b l e 2 - 1

「おはよう花音ちゃん」

「…おはよう、ございます」

目が覚めたら夢だった、とかいうオチを期待していたのに、やっぱりそれは無理だね。

キラッキラの笑顔が眩しい。本当にきれいな顔。日本とイギリスの血が絶妙なバランスを織りなして作りあがったんであるうその姿は、この人モデルですよ、と言われても、まあそうでしょうね、と頷いてしまうほどに洗練されていた。まだパジャマであるスエット姿なのに。なんか高級に見える。悔しい。あれきつとユニ　ロでしょ？後で確かめよう。

今日は12月23日。三連休の初日だし、惰眠をむさぼる予定だったのに、変態同居：違う。ルイ、さんのことが気になってやたら早く目が覚めてしまった。

にも関わらず、リビングは焼きたてのパンの香りで満ちている。

「いいにおいですね」

「パンを焼いたんだ。ラズベリーとくるみのパンだよ」

「わあ！大好きです！」

「えっ！？もう僕のこと好きになってくれたの！？触っていい！？」

「違います。パンの方です」

ふざけんな変態が。

手をワキワキするのはヤメロ。

即座に否定すると、しょんぼりしながら、キッチンに戻っていく後ろ姿がなんだかわい。

言ってることは全然かわいくないけど。どんだけ触りたがり屋なんだ。

おっといけない。変態呼ばわりはやめなきゃね。

昨日はあれから、ルイさんの作ってくれたおいしいごはんをたらふく食べて、コンビニで買ってきた焼酎を烏龍茶で割ってガブガブ飲んだ。

大抵の男の子にはヒかれてしまう酒豪っぷりを自覚している私は、うわばみ蟒蛇のように酒を飲む私を見てもこに嬉しそうにしているルイさんに少し驚いて、この人も酒飲みなのかも、と嬉しくなって同じようにお酒を勧めてみた。

だけど「飲むと人格が変わるらしいから、どうしようかな…」と聞いた瞬間に、渡したグラスを引たくって自ら一気飲みさせて頂いた。

酔っ払った変態。ブルブル。こわい、こわすぎる。

それからひたすら食べることに徹した私は、満腹になってすぐものすごい眠気に襲われて、片付けも手伝わないままコタツで寝入ってしまった。

うん。わかってる。食うだけ食って片付けもしないまま寝ちゃうとかありえないよね、あと変態になにされても仕方ない状況だったよね。ごめんなさい、私が悪かったです。

だけど「花音ちゃん、風邪ひいちゃうよ」と優しい声で起こされた時には、もうすでにテーブルもキッチンも綺麗に片付いていて、も

ちろん私も寝たままの体制だった。きつと何もなかったと信じてる。

「起きてすぐだけど、朝食は食べられるかな？」

「食べます！」

「よかった。もうできるから、座って待っててね」

「なにか手伝えることありますか？」

「じゃあ、テーブル拭いてもらえる？」

「はい」と返事をして布巾を洗う私を、ものすごい麗しい目で見つめてくる。

綺麗な人に見られるのって緊張するよね。

頼むからあんま見ないで欲しい。

お返しとばかりにこちらでもコッソリ盗み見しようと目線をズラして、フライパンから出来立てのスクランブルエッグをお皿に盛り付けているルイさんを見る。

慣れた手つき。ほどよい半熟のそれは喉から手が出そうになるほどおいしそうだった。

当初の予定をすっかり忘れ、ルイさんというよりスクランブルエッグに釘付けになっていた私は、瞬間飛び込んできたキレイな手が髪をさらりと耳にかける姿を見て、なぜか赤面してしまった。

ひとりで顔を赤くしている私に気付いたのか、ルイさんは目線を合わせて微笑みながらこちらに一步近付くと、腰をかがませて顔の高さを私のそれと同じにする。

私の身長は168センチで、女の子の中ではかなり高い方だ。  
その私にこれだけ腰を曲げてやっと顔の位置が同じになるって、一  
体何センチあるんだろう。

不思議に思っていると、どんどん顔が近づいてくる。

え？え、えええええええ！？

「おっと、危ない」

笑みは崩さないままルイさんは呟くと、先ほど詰めた距離をすっと  
引いた。そして顔を両手で覆ってから、前髪をかきあげてこちらを  
向く。

私はといえば、あんなに至近距離で見たのその肌に、毛穴がひとつ  
も見当たらなかった事実に驚いていた。  
色気なくてスミマセン。さっき赤くなったのはなんだったんでしょ  
うね。気のせいですかね。

「そんなにかわいい目で見つめないでよ、花音ちゃん」

やれやれといった風にかぶりを振りながら、これまたキレイな眉根  
を寄せる。やけに様になるなパート2。外国育ちの賜物だろうか。

「うさぎさんみたいな花音ちゃんが、真っ赤な顔をして僕を見つめ  
るもんだから…あまりにかわいくて唇舐め回したくなっちゃったよ。  
危ない、危ない」

「ああ止まれてよかった、花音ちゃんの嫌がることしたら出ていか  
なきゃだもんね」と言いながら、スクランブルエッグを盛ったお皿  
を持って私の横を通り過ぎる。

.....。

えーと。

うさぎさん、とはこのふたつ結びのことかしら。この位置でしばらくのうさぎはないんじゃない？ まあそれはいい。

今、くちびるまめまわしたい、って言ったよね？

え、言ったよね？ 聞き間違いじゃないよね！？

なに！？ 私もしかして唇舐め回されるところだったの！？

イヤだ！！ キモチワルイ！！！！ いくら見た目が良くても好きな人以外からされるなんて拷問もいとこ！！ やっぱ変態だ！！  
おいしいご飯を作る見た目のいい変態！！

やっぱ追い出した方がいい！？ いいよね！？

ああでもラズベリーとくるみのパンが私を呼んでる！ あれ食べてからでいいかなあ！？

「花音ちゃん、テーブル拭いてもらっていい？」

「.....ッ！..！」

てゆうかそんなこと思ったとしても黙っててくれりゃいいのに！  
いや出来れば極力思わないで欲しいけど、この際、ね！！ 百歩譲って！！！！ ああでもなんで私が譲歩しなきゃいけないの！？ なんてあんなに変態なおおおお！？

「花音ちゃん？」

甘ったるい声で呼び続ける変態にだんだん殺意が湧いてきた。  
女とみればああいう態度なのだろうか。昨日は天然かと思ったけど

違うようだ。一辺後ろから思い切り殴られたらしい。鈍器で。

だけど部屋のいろんなところから香るおいしそうな匂いに、私の腹の虫は勝てない。

変態は嫌だけど、ラズベリーとくるみのパンを食べたいという気持ちの方がどう考えても大きい。

変態はいつでも追い出せる。だけどあのパンはその変態がいないことには食べられない。食べられないのだ！あと欲を言えば他のレパートリーもぜひ食べたい！

「今行きます…」

小さく返事をしたのと同時に、食いしん坊で貪欲な私のお腹が、ぐうっと音をたてた。

## t r o u b l e 2 - 2

キッチンから出て、リビングに移動する。

スクランブルエッグのお皿を持ったまま立っている変態がにっこり笑いかけてきたが、なるべく視界に入れないようにしてテーブルを綺麗に拭いた。

お皿をテーブルに置きながら、「つれないなあ」って呟くが聞こえたけど気にしない。

コワイ。変態、こわい。

「じゃあ他の料理も持ってくるね」

「…運ぶの手伝います」

「大丈夫だよ。花音ちゃんはゆっくりしてて」

あまりしつこく言ってもかえって迷惑だろう、と都合のいい解釈をした私は「じゃあ顔洗ってきます。片付けはやりますね」と声をかけて洗面所に向かう。

ポンプ式で、泡になってでてくるお気に入りの洗顔料で顔を撫でるように洗う。

もともと肌は荒れにくいし丈夫な方だ。だけどあの変態の絹のような肌を間近で見た私は、こここのところ停滞気味だった美意識とやらを引っ張り出してきて、念入りにケアする。

もちろん毎日のスキンケアに手は抜いていない。要は気の持ちようなの！今日からサボってた美顔器もやる！

決意を新たにリビングに戻れば昨日の夜と同じく、テーブルにはたくさんの料理が並んでいた。

「おかえり。準備できたよ。食べようか？」

すでに席についていた変態がこちらに声をかけた。

これ当たり前だけど、朝からこの人1人で作っただよね！？

「おおお、おいしそ〜！！！！！！」

感動のあまり若干挙動不審な私を見ても、やっぱり嬉しそうに笑っている。まあある意味懐の深い人なんだろう。うん。そういうことにしておこう。

「たくさん食べてね」

「はい！！いただきます！！」

ぴよこん、と飛ぶように着席してすぐにお箸を手取る。

どれから食べようか、どうしよう、腹がはちきれてもいい！！全部食べる！

ラズベリーとくるみのパン、スクランブルエッグ、コーンスープ、鮭のムニエル（ローズマリーが添えてあった。凝ってる！）、ウィナーにチキンナゲット、シャキシャキレタスのサラダ。

ホテルの朝食バイキング顔負けだ。こんな贅沢なおうち朝ご飯生まれて初めて！

きれいに切り分けられたパンを一口頬張れば、涙が出そうなおいしかった。



「くおいしい！！！！！」

「よかった。花音ちゃん、朝食は食べないって聞いてたんだけど、つい作りすぎちゃって」

その細く綺麗な手でパンをつまみながら話す。食べ方も綺麗なこと。様になってるパート3。映画にできそうだわ。

「お母さん情報ですね…。確かに普段はあんまり食べませんけど、たまにパンをかじってから仕事に行くことはありますよ。お母さんの送ってくれるベーグルとか」

「ああ。玲子さんのベーグルは絶品だね。」

「食べたことあるんですか？」

「うん、もう何年も前にね。」

て、ことはだ。この人私がまだ実家にいるころにうちに来たことがあるんだろうか。

そのままコーンスープを飲めば、これまたおいしさにうなり声をあげてしまった。

「んんんん！！！」

「花音ちゃん、どうしたの？」

「おいしい！！こんなおいしいコーンスープ初めてっ！！クールじゃないですね！！？」

カップをダンツとテーブルに置いて主張すれば、変態は声をあげて笑った。

「はははっ！うん、それも僕の手作り、です。気に入ってもらえてうれしいよ」

まあなんと！コーンスープって作れるの！？いやクールだ  
って私からしたら贅沢品なんだよ！？コーンスープ界では高い方  
だし、もちろん味もおいしい。大好き。けどこの手作りコーンス  
ープはそれをさらに上回る！なめらか！なめらかです！！  
それからどんどんいろんな料理に手を付けていくうちに、とくに  
胃袋臨界点は突破したけど残念なことに手が止まらなかった。  
どの料理も、おいしすぎる。

「幸せ。あゝ太る。でもおいしいっ！！」

「花音ちゃんは痩せすぎだから、少しくらい太っても大丈夫だよ。  
今のままじゃ僕が抱きしめたら折れちゃいそう」

「させません」

「じゃあ僕の料理をいっぱい食べて、僕が力いっぱい抱きしめても  
折れない体になったら、抱かせてくれる？」

舌なめずりすなー！！！！！！綺麗な顔が台無しだわ！！  
抱くの意味絶対違うだろ！！

「嫌です。無理です。あり得ません」

思いついたままに否定の言葉を並べれば、変態は少し悲しそうな顔をした。まああちらも人間だ。これだけ否定されたら悲しいわな。というか誘いを断られたことなんてあるんだろうか？

「あ、そうだ」

「はい？」

またなにを閃いたんだ変態。せつかくのおいしい料理が台無しになるから黙っててくれないかな。もうちょっと落ち込んでたらいいのに。

「僕、布団が欲しいんだけど買ってもいいかな？」

「え？あ。ごめんなさい、ソファアの寝心地悪かったですか？」

うちの間取りは1LDK。玄関を入ってすぐ右手にトイレとお風呂場があつて、短い廊下を抜けると10帖ほどのリビングダイニングに繋がる。そしてリビングの右側に3.5帖の寝室。

都心でこの広さ、しかも、長風呂大好きな私はどうしても追い炊き機能のついている部屋に住みたくて、そうなると新しめ物件じゃないと要望は叶わない。

部屋は狭くてもいいからとにかく追い炊きの付いている物件を夜な夜な探していた私を見かねて、母が飲み屋で友達になつたらしい不動産業を営んでいるという人を紹介してくれた。

そして「お母さんには、お世話になったから」と、変態と同じようなセリフを放ったその人は、この部屋をとんでもない破格で私に貸し出してくれたというわけ。

母のおせっかいにはこんな風に度々恩恵を受けている。迷惑被るこ

とも多いけど。今みたいに。

私は寝室にベッドを入れて寝ていて、もちろん部屋が狭いからベッドとタンス置いたら足の踏み場もないけど、生活スペースと寝る場所を分けられるのはすごく助かる。突然友達が来てもしビングのもの寝室に放り投げたりできるし。ズボラですみません。掃除は一応するけど、いつ誰が来ても平気なほど片付けてはいません。ホントすみません。

だから昨日夜、変態にはリビングで寝て頂いたんだけど。（しつかり寝室の鍵かけてね。自意識過剰って呼んでもいいよ）

リビングにはソファ―ベットっていう、背もたれを倒すとベットになるすぐれものがあって、友達が来た時はいつもそこで寝てもらってる。遠い昔の彼氏とやらに買ってもらったから値段は覚えてないけど、すごい寝心地が良くてはこの家に泊まった人には評判のいいものだった。はずなんだけど。

変態の身体には合わなかったかな。睡眠は生活するうえで大事なことで。二週間とはいえ快適に過ごしてもらいたい。

「寝心地はすごくよかったよ。だけど僕、布団に憧れがあって」

「ああ、なんだ…」

いや、気をつかってそう言ってるのかもしれない。だけど割と心配したからちょっと拍子抜け。布団に憧れて。外国暮らししてたんだから分からなくてもいいけど。新しい家でやったらいいじゃないの。

「もちろん出て行く時には一緒に持っていくよ。せつかく日本に帰ってきたんだし、早く布団の感触を味わいたくて」

「まあ、別にいいですけど。持って行ってくれるなら」

「本当！？ありがとう花音ちゃん！」

手の平を顔の前で組んで大喜びする変態はとても幸せそうだ。

しかしリアクションがでかい。その間も私はナゲツトやサラダをもぐもぐ食べ続ける。ドレッシングも手作りっぽいな。なんでこんなにおいしいんだろう。いつそお店でも開いたらいいのに。

「さっそく今日買いに行きたいんだけど、花音ちゃん今日の予定は？」

「寝ます。1日。泥のように」

「つまり予定は何もない、っていうことだね？」

嫌な予感がする。すごい嫌な予感がする！！頷いたらダメだ！私の予想が正しければ、ものすごい面倒なことになる！

もう食後のコーヒーにたどり着いたらしい変態は優雅にカップを持って微笑んでいる。少食だなあ。

「あります。私は今日寝るんです」

「誰かと約束があるわけじゃないよね？」

「寝るという自分自身との約束です」

「今日布団を買いに行きたいんだ。案内してくれない？」

「イヤです」

「お願い。この辺のこと、まだよく分からないし」

「他の人に頼んでください」

「花音ちゃんと行きたいんだ」

嫌だ！！無理無理！！こんな目立つのと一緒に歩いたら世間様の視線を一心に集めちゃうじゃない！！ただでさえ休日ひとりで歩くといろいろあるのに！

目立ちたくない！絶対に目立ちたくない！！

t r o u b l e 2 - 3

「とにかく私は今日は寝るんです！寝るったら寝るんです！！いつてらっしゃい！！」

「僕と一緒に出掛けるのは何か不都合でもある？」

「いや、その…」

「なに？」

「別にそうゆうわけじゃ…」

「言つて。花音ちゃん」

「……………」

「花音ちゃん？」

「なんか、目立ちそうで…」

これはだいぶ失礼だ。自分でもわかつてる。だけど訳あつてもうとにかく静かに暮らしたい私は、自ら目立つようなことは極力したくない。ただの言い訳になっちゃうかもしれないけど。

けどそんな私の失礼な発言もなんとも思わないのか、変態は首を傾げるとそのまま頬杖をついてカップをテーブルに戻す。

「花音ちゃんだって目立つでしょう？いろんな雑誌のモデルやってたくらいなんだから」

「なあああんで知ってんのよお！？」

「あつ。いいなあ、その口調。素の花音ちゃんが見れて嬉しい」

おっと、思わずタメ口で話しちゃった。我を忘れるとその他いろいろも忘れちゃうんだよね。ダメだなあ…タメ口で話すと否が応でも親しくなっちゃうから気をつけてたのに。

「花音ちゃんの載ってた雑誌、持ってるんだよ。あ。もちろんかがわしいことには使ってないよ？」

「いかがわしい雑誌に載った覚えはなあああい！！！！」

「確かに女の子向けの雑誌だったけど、水着の写真もあったでしょ？」

「ファッション！ファッションだから！！グラビアとは違う！一緒にしたらグラビアの方たちから怒られるから！！」

「え、そうなの？」

「いや知らないけど！！グラビアモデルさんの方がよっぽど大変だと私は思っている！」

「花音ちゃんの水着姿っただけで僕もうドキドキしちゃって大変だったのに。体のアチコチに支障をきたしたよ。あんなとこやこんなとこが」



「変な言い方するなあ！！あんたのそんな情報いらないのよ！！てゆーか燃やせ！今すぐその雑誌を燃やしてくれ！！」

「イヤだよー僕の宝物だもん」

だもん、じゃねえええええ！！！！！！

完全にブチ切れた私は、お皿に残っていた鮭のムニエルを口に放り込むと「ごちそうさまでした」と挨拶をしてから二人分の開いたお皿やお箸をお盆にうつす。そしてそれを持って立ち上がると、そのままキッチンへ移動して全力で洗う。

これを洗ったら寝室に閉じこもろう。鍵かけて。

あんな変態と一緒に出掛けるのは絶対に御免だ！！

クスクス笑いながらコーヒーを飲み干した変態は、残った料理にラップをかけて冷蔵庫にしまいだした。楽しそうなのがムカつく。

無言を決め込んだ私はそのままのすごいスピードでお皿や変態が下げてくれたカップを洗うと、予定通り寝室にダッシュで逃げ、逃げこみ…。

逃げ込みたかったのにいいいい！！！！！！

「ダメ。捕まえたよ、花音ちゃん」

うわわわーん！！！！！！

背後からすっぽりホールドされた私は心の中で大号泣。

しかも約束通り、私に触れないように腕も背中を浮かせているのが余計に泣きを誘う。

長い手を輪っかのようにして上からすぽっと捕まえられた。長身と

その長い腕のなせる技だ。非常に腹立たしい。

「Please Kannon... go with me...」

今のはわかったぞ！なんか頼まれた！多分一緒に行こうって言われたっ！

こんな状況だけど私はきつとどや顔をしているだろう。英語がちょっとわかる気分になってきたぞ。初めて意味を聞き返さずに答えられることに無性に喜びを感じる。それが例え今時の小学生ならわかるであろう言葉でも。その喜びをかみしめたい私は、言葉の意味を理解したことをひけらして（自分に）再度断りを入れた。

「一緒には行きません」

「if you don't come with me , I become a lost stray child」

「ダメです！」

「Are you OK even if I lose my way？」

「ダメダメダメ！！絶対ダメ！！！！！！！！」

もちろん何言ってるかなんてもうさっぱりわからない。わからないけど持てる力全てを使って否定する。すぐ後、パツと拘束の手が解かれる。ああよかった。やっと諦めてくれた。そう思ってた後ろを振り向くと、変態は満足げな顔をして立っていた。なんでそんなに嬉しそうなの？本当はひとりで行きたかったとか？もしくはDM？

「よかった。じゃあ、支度してきてね。僕も着替えてくるよ」

「はあああ!？」

スタスタと自分のキャリーケースのところまで歩いて行くと、今日着ていくらしい服を引っ張り出して頷いている。いやいや!おかしいでしょ!？何がどうしたらそういう話になるわけえええ!？!

「ちよつと!!ダメだって言ってるでしょ!？人の話聞きなさいよ!!」

「だって花音ちゃん、ダメって言ったよね？」

「…はい？」

「言ったよね？」

しゃがんだまま凄みのある笑顔を向けられてちよつと身体が固まる。なんだこれ。いつも違う意味で怖いぞ。冷や汗ものの私は余計なこととは言わずに事実を完結に述べた。

「…言いました」

「ね?」僕が迷子になってもいいの?」って聞いたら、ダメって言ったもんね?じゃあ花音ちゃんが一緒に来てくれないと、僕迷子になっちゃうから。」

「なあああああ!!な!!な!!な!!なあああ!？」

「取り消しはできないよ、花音ちゃん」

「ずるいでしょそれ！！ありえないから！！！！私英語わかんないの知ってるでしょーっ!?」

「一緒には行かないって言うからには、その前の会話が理解できたんでしょ？僕と話してるうちに英語が理解できるようになったんだと思ってた。違うの？」

「たった2日でわかるようになるかぁー！！！！お茶の間留学も聞いてびっくりだわ！！！！！」

「でも、一度言ったことは取り消さないよね。花音ちゃんは」

「……………！！！」

この変態、まさか……………！！！！！！

いや、ありえない。水着を着てファッション撮影をしたのは、4年前くらいのことだ。

就職する直前、大学の卒業間近の頃。その頃の雑誌なら、実家に腐るほど置いてある。

きっと母がいつものように無理やり見せたんだろう。そしてまた帰りにお土産とか称して持たせたんだろう。いつものことだ。もらった方は迷惑だろうに。なんでよりもよって水着のカット。他にもいっぱいあっただろうに！！

つい悪い癖が出そうになった私は必死それを胸の中に押し込める。

この人は、お母さんの友達の息子なんだから。

お母さんの予定も知ってたし、ベーグルだって食べたことあるって

言ってた。ましてやあの口調をマネするには、会ってなければできない。

「それに、クリスマスの買い物もしたいんだ。イブの夜はフォンダンショコラを焼こうと思うんだけど」

「フォンダンショコラっ!？」

目からビームでも出そうになる程に私の目は光った（多分）。

食べたい、絶対食べたい!! 今年仲間うちにはみんな彼氏がいるので、お母さんの予想通りイブはワインでもがぶ飲みしようと思ってたところだったんだ!

ひとりで過ごすよりは寂しくないし（相手は変態だけど）、何よりフォンダンショコラが食べられるならこんなに嬉しいことはない!

見るからにテンションが上がった私を見て、服を選び終えたらしい変態は立ち上がった。

「よかった、イブの夜は一緒に過ごせそうだね。特別な日だから、少し高くてもいつもとは違うチョコレートを使って作りたいなあと思ってるんだけど、どこかいいお店知ってる？」

「知ってる知ってる!! 青山にあるショコラ専門店! そのチョコレートすっごいおいしいんだけど、実際お店でも使ってる製菓用のチョコも最近販売してて、それで菓子作りするとこれがまたおいしいんだって! 私はお菓子作りなんてしないから食べたことないんだけどね」

何を隠そうわたくし桜木花音24歳、三度の飯よりチョコレートが大好きなのでございます!!

基本的に食べ物なんでも好きだし甘いものも好きだけど、チョコは格別！ニキビが怖くては大量には食べてないけど、何か自分にこ褒美って時には必ずチョコレートを食べることにしてる。

できることなら毎日毎食後、寝る前、朝起きた時、1日5回板チョコを食したい。それくらい好き。

「ああ、いいね。クリスマスイブにぴったりだ。案内してくれる？」

「うんっ！…あ。」

「それなら布団も一緒に買いに行ってくれるよね？最初からこの方法で攻めればよかったな…」

指先を顎にあてて変態が考え込む。いや、多分最初からそれだけ言われたら地図書いて渡して終わりだったと思うよ。

いろいろ混乱してたからフォンダンショコラという単語だけで余計にテンションぶち上がったんだと思うよ。ある意味作戦勝ちだよ。

「じゃあ着替えてくるね」と言っただけで変態は洗面所へと向かう為によりビングから出て行った。

それを見送った私は長く息を吐くと、自分も寝室へと足を向ける。

よし、こうなったらガッツリ化粧してあの無駄に綺麗な顔とバランスとれるようにしなくちゃ。

まあガッツリ化粧したとこであの綺麗さには適わないけど。でも何にもしないよりマシだよな。

少しだけ胸に灯った危険信号と、昔の話を自分からするくせに、こちらが口を開こうとすると食べ物のことでこまかす変態には気がつかないふりをして、私は寝室に戻った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5279z/>

---

トラブルDAYS！

2012年1月8日21時48分発行